

風とされる

2008年、新年礼拝は、「四つの生き物のアーメン」から始まりました。新しい礼拝の新しい時。礼拝はいつも新しく、礼拝によって時は新しくされる。主にあるもの、いつも新しいのですが、今年はとりわけ「新しい時が来た」という思いが迫ります。

年末のカウントダウンの祈りの中、ちょうど新年を迎えた時、「わたしの時が来た」と主が語られたような気がしました。主の時。すべては主の時なのですが、あえて「主の時が来た」と言われるのだとしたら、主の願いが成るのが大きく前進する時が来たということだと思ったのです。

今年は、風の教会が建つ年です。これは一つの建物が建つということだけではなく、霊的には大きなインパクト、それこそ新しい歴史が始まるというほどのことだと思います。

目に見えるカタチとしては南芦屋浜に小さな教会堂が建つということだけではないのですが、風の教会が建つことは新しい時のしるしだと思います。

「たつ」という時、たしかに建物が「建つ」という字があてはまるのですが、私は「立つ」と「発つ」が先に浮かんでしまいます。一人一人の人がさんびの信仰に立つ時、すべては発つ(始まる)。これが風の教会が建つということだと信じるからです。主が私たちに与えて下さった「さんびの信仰」によって、その信仰に立つ者、すべての者の内に建つ。一人一人の内に建つ。たとえ一度も南芦屋浜に来ることができないという人にも、風の教会が建つ。これは5年前、会堂建設のために祈り始めた頃、「あなた方のさんびと祈りの上にわたしのからだは建つ」と語られたことを現していると思います。

お金の上に建つのではない、人の努力によるのでもない。さんびと祈りの上に建つと言われたことの意味が今あらためて迫るのです。

さんびも祈りも蓄積がきかないものです。かつて、願いが成るために祈り込むとか、例えば一日に少なくとも三時間祈り、時には徹夜して祈りを積むことが望ましいと聞いたことがあります。私は何かヘンだと感じていました。それでは努力した者勝ち、体力、気力勝負のように聞こえました。私は「主よ」の一言でも主が働いて下さるのを見えていました。信仰しかいない。

信仰によってされるなら、祈る人も祈りも「積み重ね」となるのではなく、むしろ「風」とされることでしょう。毎日毎日さんびをするのも、さんびの効果を高めるためでもない、ましてや、さんびがうまくなるためでもない。

さんびも祈りも蓄積ではなく、風とされるものだと思います。さんびと祈りの上に建つのが風の教会とは、まさにその通りですね。

一人一人の内に風の教会が建つ、とは、一人一人が風とされるということになります。

風とは何でしょう。風とされるとはどういうことでしょう。

風とは主の息、主のいのちですから、風とされるというのは、主の息とひとつ、主のいのちそのものとされるということになります。主の息とひとつ、そして主のいのちそ

のものとされるということ、まず思うのは自由とよこびです。自分の主張を持たず、風のごとくに軽やかにされている姿が浮かびます。

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである。(ヨハネ 3:8)

主の思いのままに吹かれる風のような私でありたいと思います。そういえば、阪神大震災のあと、モノは何も要らない、風となりたかったことを思い出します。モノによって私は死にそうになったのですから。あの時は「野の花を見よ」という声を聞いたのでした。

野の花のことを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。きょうは野にあって、あすは炉に投げ入れられる草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるうか。(ルカ 12:27-28)

飲み水がほしい、安全がほしいと震えているただ中で、主が願われたのは、「野の花を見よ」の信仰でした。飲み水よりも、安全よりも、もっと大切なものがある。地震のあとの苦しみと悲しみをまことにいやすものを知れ。それは今の地球のいやし守るものです。さんびの信仰が語られていたのですね。

新年礼拝の日の朝、私は「声」を聞きました。今年は風の教会が建つうれしい年だと思ったからでしょうか。

お前は野の花一つでも造ることができるのか

なぜ、新年にこんなことが問われるのでしょうか。地震後の、「野の花を見よ」も、その意味が分かるのに時間がかかりましたから、これもすぐにはすべては分からないのかもしれない。しかし、今言えるのは、野の花一つさえ造ることができない私であるということです。野の花を造られた神を見よ。野の花一つをほんとうに見るなら、そこに、神の願いを知るであろうということだと思います。風の教会が建つという時に、あえて主は誰が風の教会を建てるのか、風の教会が何のために造られるのかを思い起こさせて下さったのだと思います。野の花は風の教会の原点なのです。

そしてさらに思います。

風とは礼拝の姿です。風とされるのは、霊とまことをもって主なる神を礼拝するため。この礼拝は、御座の前の礼拝、天の礼拝です。風の民は天の礼拝に呼ばれた者たちです。

野の花の信仰(さんびの信仰)をもって、風の民とされ、天の礼拝をする。一人一人が風とされ、風とされる場所に風の教会が建つ。

風の礼拝がなされるのでしよう。